慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	現代ナショナリズム理論の課題 : "民族"の歴史的展開とその担い手について
Sub Title	A consideration on some problems in the theory of modern nationalism : historical development of "nation" and the actual leading class of its movements
Author	白井, 厚
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1959
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.52, No.4 (1959. 4) ,p.334(48)- 349(63)
JaLC DOI	10.14991/001.19590401-0048
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19590401-0048

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

現代ナショナリズム理論の課題

――〝民族〟の歴史的展開とその担い手について――

白井厚

一、はしがき
二、E・H・カーのナショナリズム論
三、ナショナリズムの史的展開
四、ナショナリズムの批判と現代の課題

一、はしがき

ナショナリズムとはあいまいな言葉である。

それは、今日のアジア、アフリカなどの民族解放の動きを意味して華々しく脚光を浴びているが、前世紀のヨーロッパの国民主義も、今世紀のファシズムも、やはりナショナリズムと呼ばれた。それは楯の両面を持ち、ある時には進歩と解放の光明であるが、ある時には反動と侵略の専制政治にすぎない。ごく一般的には、「ナショナリズムとは、ある nation の解放、独立、統一、発展、拡大などを求める思想と運動である」とでもいえようが、その内容は極めて変化に富んでおり、国民主義、国家主義、民族主義などの訳語をあてはめても、その全貌を表わすことは出来ない。[1] このような内容の複雑さが、ナショナリズムについての一貫した理解を妨げ、労働運動や社会主義との歴史的な関係を明確に把握することを困難にしているのである。

しかしながら、ナショナリズムの問題は、歴史の現段階において特に重要な意味をもっている。第一に、資本主義の側において、アジア・アフリカの民族解放の運動が、世界の政局に強く影響し、植民地時代の終幕を告げて、民衆の生活や思想を大きく変えている。第二に、社会主義の内部では、チトー主義の評価について見解が動揺し、また東ベルリン、ポズナン、ブダペストなどの痛ましい悲劇は、社会主義国の民族政策について、深刻な反省を求めずにはおかない。また「人類」の問題が、原水爆を契機として史上はじめて現実の行動の上での課題となり、人間性の危機が叫ばれた場合、「『人類』の問題は『階級』や『民族』の問題を単に包括しているのではなくて、むしろ一層細密化することを要求している」[2]のである。

このような新しい事態に対して、ナショナリズムの理論は、実は欧米系もマルクス主義系も共に立遅れを見せてきた。欧米系の理論は、思想史的にはかなり詳細なものがあるが（例えばC・J・H・ヘイズ）[3]、非西欧的なナショナリズムは西欧のそれとは異質のものであるとして、その分析がアジアに及ぶことははなはだ少ない。

またマルクス主義の理論は、植民地の独立革命はプロレタリアートの指導によって初めて完全に行い得るというコミンテルン方式によって、ガンジー、ネルー、スカルノなどの評価を誤り（ソ連共産党第二〇回大会によって再評価された）、またプロレタリア国際主義は、その柔軟性を失ってソヴェトの大国主義を擁護する結果となった。スターリンによれば、社会主義国の民族は、「その階級的構成と精神的様相の点でも、その社会的・政治的利害と志向の点でも」、ブルジョア的民族とは根本的に異なっているし、「はるかに全人民的」と説明される。[4] だが東欧の諸国においては、事情は複雑であった。その失敗は、勿論権力欲とか赤色帝国主義などという説明で理解されるべきではなく、社会主義の場合、理論と現状分析の誤りが反革命分子の活動舞台を与えたものであろう。長洲一二氏は、「ブルジョア的民族」と「社会主義的民族」という、本質的であるがあまりに一般化された定式自体の中に、アジア・ナショナリズムの評価を動脈硬化におちいらせる原因を見、「『社会主義的民族』についての抽象的には正しい規定も、現実にはなんら問題を解決できぬ美辞麗句化する危険、さらにはロシア至上主義というゆがみをプロレタリア国際主義にもちこむ危険をはらんでいた」[5]としている。

そこで、現在のナショナリズム理論にとっての焦眉の課題は、このような現実の進展に対する理論の立遅れをとりもどし、単に現実の事後承認をするのではなくて、積極的な政策に対する根拠を与えることであろう。そのためには、欧米系とマルクス系のナショナリズム理論を批判的に摂取し、ナショナリズムの発展の歴史を具体的に把握し、その帰結にもとづいて今日の実態を直視せねばならない。ナショナリズムは多面体にもたとえられて、[6] その関係する分野はまことに広く、もとより小稿をもっては尽くしがたいが、各面の構造が実際それによって規定されるような、歴史法則との基本的な関連を考慮にいれて、以下それについてのいくつかの問題にふれてみよう。

（1） nation の語源は出生を表わし、ロシア語の народ が род（血縁）からくるのに似ている。だが今日では、Volk が封建社会における、潜在的な民族であるのに対して、nation は近代国家の政治単位であり、自覚的な統一民族である。*Cf.* A. Vierkandt; Gesellschaftslehre, 1928. 日本語では、国民主義という場合国民全体を、国家主義は支配者を中心とし、民族主義という時は他民族との対立に重点を置いて考えるのが普通なので、これらはナショナリズムのある段階をそれぞれ示すことはできる。

(2) 江口朴郎「歴史の現段階」一九五八年、一四一頁。

(3) ヘイズは、ナショナリズムの系譜を次ぎのようにみている。

humanitarian nationalism→ (Rousseau, Bolingbroke, Herder)

→ { Jacobin nationalism (Napoleon) / traditional nationalism (Burke, etc.) / liberal nationalism (Bentham, etc.) }

→integral nationalism (Mussolini)

それは、歴史の実際よりは理念の展開であり、彼の説く性格は、今日のナショナリズムにはあまりあてはまらないようである。

(4) スターリン「民族問題とレーニン主義」国民文庫一三〇～一頁。

(5) 長洲一二「現代民族問題とマルクス主義」「現代マルクス主義」I、一九五八年所収、五九頁。

(6) L. L. Snyder は "The Meaning of Nationalism" 1913. において、「多面体の性質は、その観察がいかにくわしいものでも、その一面だけを観察するだけでは何も理解できない。……ナショナリズムの研究は、われわれが multidisciplined thinking と呼ぶところの、関連諸科学の分析の結果を駆使した多面的かつ綜合的な考え方に基礎を置かなければならない」として、E. Barker, C. J. H. Hayes（歴史学）、H. Kohn（社会心理学）、M. S. Handman（政治学）、M. Wirth（社会学）、その他心理学、精神分析学などのナショナリズム論を紹介している。その視野はまことに広大であるが、このような綜合のみをもってしては、ナショナリズムを歴史の法則と関連させて理解することはできないであろう。彼は西欧ナショナリズムと非西欧ナショナリズムを峻別し、混乱を防ぐために、いろいろのナショナリズムに修飾する形容詞をつけることを提案しているが、相互の有機的関連を示してはいない。

二、E・H・カーのナショナリズム論

今日の欧米系のナショナリズム論において、最もよく知られているのは E. H. Carr の Nationalism and After, 1945. である。

彼は、「近代的な意味での nation は、中世キリスト教世界の国際的――というよりも前国際的――秩序が崩壊したところから生れたものであり、大胆な、自己主張的な個人主義のルネサンス精神が nation という集団的、民族的な平面に投影したもの」[1]と認めるが、「近代の国際関係史は三つの部分的に重り合った時期に分れ、その時期によって、政治的実体としての nation についての見解には甚だしいへだたりが見られる」[2]ことを強く主張して、その歴史を次ぎのように述べている。

第一期……（中世的結合の分解、民族国家（ナショナル・ステイト）と民族教会の樹立から、フランス革命とナポレオン戦争まで）

国家の主権を行使するものは国王であり、この時代に君主たる個人の相互関係を律する国際法が生れた。主要な nation 間の有識階級はフランス語を通じて相互に交際し、一般市民は主権者たちが戦争をしている時でも互に自由に商取引をする「国際的」な時代であった。この時代の経済政策、重商主義の目的は、「共同社会あるいはその成員の福祉を増進することではなく、主権者に体現される国家（ステイト）の力を強化すること」で、それは、E. F. Heckscher が定義したように、「国民（ネイション）のための富であったが、しかも人民（ピープル）の大多数がそれから除外されねばならぬ富」である。

第二期……（ナポレオン戦争から、ヴェルサイユ講和まで）

本質的にフランス革命の所産であって、「国王相互の戦争に終始した騒乱の第一期と、現代の国家相互の戦争に彩られる明らかに一層甚だしい騒乱の時代とのあいだに位する牧歌的な間奏曲」[3]である。国際関係は国王の個人的利害、野心、感情ではなく、国民の集団的な利害、野心、感情によって支配され、政治的な「ナショナリズム」と経済的な「インターナショナリズム」が均衡を保ち、民主主義的な中産階級のナショナリズムが成立する。

第三期……（一九一四年から一九三九年まで）

ナショナリズムの破局的成長とインターナショナリズムの破産の時代。その原因は、(1)新しい社会層が国家の実質的な成員の中に導入されたこと、(2)経済権力と政治権力の再結合、(3)国家数の増加、である。国家は社会化され、「はじめて大衆の経済的要求を全面に押し出し、……賃金および雇用の防衛が国家政策の対象となり、……労働者に彼の国家の政策と権力に対する強い実際的関心をもたせ、……国家の社会化は、その当然の帰結として、社会主義を国家的なものにする。[4]」「社会ナショナリズム（またはナショナル・ソーシャリズム）は、その基盤を政治的目的から経済的目的に転換することによって、レセ・フェール国家を廃止し、『社会奉仕』国家を誕生させることになった。……単一の世界経済は、多数の国民経済にとってかわられ、それはおのおのそれ自体の構成員の利益に没頭することになった。[5]」

第四期……（第二次世界大戦以後）

大戦においてナショナリズムは第三期の極点と破局を明示したが、「第四期にわれわれがすでに踏み入りつつあるかどうかを云うのは、今のところまだ早すぎるであろう。[6]」

彼の分類の規準は、nation の基本的性格と nation 相互間の関係であって、彼は各時期の nation の実体をつぎのように考えている。

第一期―国王（people を nation から除外）

第二期―people 又は中間階級（後の労働者または common people を除外）

第三期―大衆（労働者）

そして国際関係は、

第一期―主権者のナショナリズムで、一般市民は国際的

第二期―国民感情としてはナショナリズムだが、経済的には単一の世界経済を形成して国際的

第三期―政治的にも経済的にもナショナリズム

このような区分は、まことに簡明で、示唆に富むとはいえ、ナショナリズムの歴史の複雑な実態の認識についてはかなり問題がある。「歴史の型とは歴史家の心の所産だ」[7]というのがカーの特徴的な歴史観であるが、歴史家の主観によって歴史上の重大な事実をゆがめ、一つの鋳型に押し込めることは許されないであろう。例えばイギリスでは、一七世紀の市民革命によって絶対主義体制をつきやぶり、議会が権力を握って原始的蓄積の過程を押し進め、ブルジョア秩序を確立するための条件を強力をもってつくり上げたが、その過程の中で資本主義生産が確立してくると、この秩序は自律性を主張して、レセ・フェールの旗印を掲げて生みの親たる「国家」から解放を求めるに至った。すでに一七七六年に、スミスは「国富論」において nations の富の性質を研究し、自由主義的な秩序確立のために封建制度と重商主義的国家政策に戦闘を挑んだ[8]のである。英仏などの絶対主義国家については、カーの説があてはまる面も多いが、ナポレオン戦争まで一括して重商主義ではなかった。同じ年代においても、各国資本主義発展速度の相違、世界資本主義機構の中に占める経済的な地位の差によって、natoin の形成、その性質、政策は大いに異なり、簡単に年代をもって区別することは出来ない。

またナショナリズムの担い手が、カーのように国王→ブルジョア→労働者と移っていったというのも正確ではなかろう。第一期についていえば、重商主義というのは原始的蓄積期（西欧では一五世紀末から一八世紀の六・七〇年代）の経済政策をさすのがふつうであって、それは必ずしも絶対王政とその運命を共にしたわけではない。カーの祖国イギリスについていえば、重商主義が最も発展した時の主体は議会であり、その政策の主柱は、国家権力を背景として特権的な外国貿易に従事する商業資本と、マニュファクチュアを基礎とした商業資本であった。また第三期の主体が大衆（賃金、雇用の防衛を問題とするのだから、主として労働者）であるとするのも問題であろう。カーのようにナショナリズムの破局から世界大戦へという変化の原因の一半を大衆の勢力の増大に求めるとするならば、労働運動と民主主義こそ戦争を生み出したともいえそうである。だがこの時期の実際は、帝国主義段階への突入によって資本主義は民主主義の実質を失い、形式的な議会主義で労働者を押えその意識を小市民化し、労働者を資本主義体制内の存在に定着し、植民地からの超過利潤でその上層を厚く包んで、彼らに偽装の祖国を与えたのであった。大衆社会という場合、それは「単にテクノロジー、資本主義の発達から直線的に出現したものではなく、こうした条件の上で独占資本が下からの要求をくみつつ、しかもその利益に沿って形成していったという側面を逸してはならないであろう。[9]」

そこで、カーの説に関連して、つぎのことを指摘しうる。

第一に、歴史の表面に現われた形式の分類ではなく、ナショナリズムの実体、その実質上の推進力を見なければならない。

第二に、年代による区分は、その年代の性質を普遍化しやすいが、実は同一年代における、経済的地位の差によるナショナリズムの性格の相違が重要である。

第三に、後期のナショナリズムは帝国主義の分析なしには理解され得ない。

第四に、西欧のナショナリズムから東欧へ、更にアジア・アフリカへという変化を、単に区別するだけでなく、資本主義の新らしい局面に対応した、相互に有機的な発展として理解せねばならない。

このような視点の欠如は、実はカーに限らず一般に欧米系のナショナリズム論に共通することである。その結果は、今日のナショナリズムへの展望を欠くか、またはただそれを嫌悪する態度となって表われた。カーによれば、「アジアでは民族自決を要求する声がいまだきかれるであろうが、それは恐らく数年前にくらべたら弱く、それほど確信に満ちてもいないであろう。[10]」――レーニンの「アジアのめざめ」（一九一三年）と比較せよ――「知識人の謂わゆる『中立』という口実の象牙の塔の特徴は、窓という窓が過去の廃墟の方にのみ開かれているという点[11]」にあるとするカーの主張は、実は彼自身にもあてはまるのである。

（1）E. H. Carr; Nationalism and After, 1945. p. 1. 大窪訳三頁。ただし訳文はかならずしも邦訳によらない。以下すべての引用において同様である。

（2）Ibid., p. 1. 訳三頁。

（3）Ibid., pp.9～10. 訳一五頁。

（4）Ibid., p. 19. 訳二八頁。

（5）Ibid., p. 21～2. 訳三二頁。

（6）Ibid., p. 2. 訳四頁。

（7）E. H. Carr; The New Society, 1951, Chap. I.

（8）「少し注意して読むと『国富論』における『国民』の取り扱い方は、各編によってかなり違うことに気がつく。すなわち、いわゆる理論編たる第一、第二篇では諸国民間の差別性はむしろ遠のいて――といってそれが完全にないというわけではないが、少なくともその基調からみてこういえる――多かれ少なかれ文明国に共通する理論的な諸規定がとりあつかわれているし、第三篇の『歴史』では諸国民が個々的にとりあげられ、その構造的な違いが富裕の観点から比較史的に検討せられている。これに反してヨーロッパの現状分析にあてられている第四篇においては、諸国民はたんに比較史的に、その限りやはり個々的にとりあつかわれているのではなく、むしろここでは政治家にひきいられ、リヴァイアサンの如き姿で対立し合うところの列強として、歴史の舞台にいちどきに立ち現われ、弱肉強食の姿をそのまま、まざまざと描かれているのである。」（内田義彦「経済学の生誕」一九五三年、一三〇～一頁）内田氏によれ

ば、スミスの問題はなぜ諸国家が対立し合わねばならないかを明らかにするにあった。スミスの全問題はまさしくヨーロッパの危機の現状分析にあてられた第四篇に集中している。われわれはここに、ナショナリズムの重商主義的段階から、国際主義的な段階を展望するスミスの姿を見ることができる。

(9) 横越英一「民主主義と民族観」岩波「現代思想」Ⅲ、昭和三二年所載、四六頁。

(10) Carr; Nationalism and After, p. 37. 訳五五頁。

(11) Carr; The New Society, p. 17. 清水訳二五頁。

三、ナショナリズムの史的展開

H・コーンは、ナショナリズムの中に、人間の最も古い、最も原始的な感情として、郷土愛、母国語愛、自己の優越感、異邦人に対する敵愾心を見出している。[1] またヘイズは、「部族(トライブ)を云い表わすのにnation という意味の言葉をもってするならば、nationalism というものが原始社会の一特質だったということは、直に認め得るところである」[2]と述べている。だが勿論、ナショナリズムは部族愛や郷土愛のように自然発生的なものではなくて、コペルマンのいうように、「ナショナリズムは、自然的、一般人間的なものではなく、特殊な関係の下にのみ発展する」[3]し、「国土への愛着は、共通の歴史、世論の力、教育……その他の方法によってわれわれの心の中に植えつけられたものである。」[4]

それではナショナリズムを生んだ特殊な関係とは何か？ 中世封建社会は、身分関係と国内関税というように、垂直、水平両方向に分断されて自足的な経済を営んでいたが、商品生産の著しい発展は次第にこの双方の障壁を取り除き、コミュニケイションを発達させて近代国家を形成するに至った。レーニンのいうように、「それをよびおこしたのは、地方間の交換の発展であり、商品流通の漸次の増大であり、……この過程の指導者であり主人公であったものは商業資本家であったから、これらの民族的結合の創出はブルジョア的紐帯の創出にほかならなかった。」[5] スターリンが明文化した、「言語の共通性、地域の共通性、経済生活の共通性、および民族文化の固有な特質の共通性のうちにあらわれる心理状態の共通性、を基礎として生じたところの、歴史的に構成された、人々の堅固な共同体」[6]という民族の定義は、このような商品生産の発達の上に築かれた大規模なコミュニケイションの強調として理解すべきである。「資本主義以前の時代には民族はなかったし、またありえなかった。……もちろん、民族の要素である言語、地域、文化的共通性などは、天からふってきたものではなく、すでに資本主義以前の時代にもすこしずつつくりだされつつあった。……この潜在力は、民族的市場と経済的および文化的中心地とをもった資本主義の興隆期にはじめて、現実性に転化したのである。」[7] この意味で、端的に云えば、民族、それは統一市場である。

かくて、「民族」(nation)は、資本主義の発展にかかわる歴史的カテゴリーであり、民族的利益とは一般にブルジョア的なものであり、民族問題とは実は階級の問題であり、その完全な解決は、階級の消滅をもって初めて達成されるのだといえよう。

そこで、ナショナリズムのこのように資本の運動の一つの表現形態[8]としてとらえられるならば、われわれは階級関係からその実際の担い手の性格を明らかにし、それ以外の階級の人々のこれに対する態度、力関係を究明することによって、全体の構造を具体的に把握せねばならない。このようにして初めて、民族の特殊性、歴史上の種々なナショナリズムの主要な性格と役割は、各国の資本主義の発展段階と、世界資本主義の中に占めるその個性的な地位に応じて、歴史法則との関連の下に理解されるのである。[9]

以上の点に留意すれば、ナショナリズムを次ぎのごとく分けることを得よう。

≪前期的段階≫

中世的支配に対して、地方や領国や公国が一つの民族を中心に結合し、絶対主義的近代国家を形成する段階。それを呼び起したのは地方間の商品交換の増加、商品生産の進展であり、国内的には統一市場を形成し、国外的には重商主義政策を採るのがふつうである。前期的というのは、この過程の担い手が商業資本であり、ブルジョアジーがまだ勝利をおさめていなくて、封建貴族との勢力均衡の上に絶対主義が支配するからである。

そこでは、〈L'Etat, c'est moi〉という言葉に表われるように、祖国の概念はしばしば直ちに国王に結び付いていて、民衆の自覚的統一意識は存在しない。近代的な個の自覚が進んだルネサンス期の市民には、ダンテ、ウルリヒ・フォン・フッテンのような国民的な自覚があったが、逆に十八世紀のドイツ貴族の間ではフランス語が用いられていた。絶対主義権力は必ずしもナショナリスティックではなくて、メッテルニヒ体制のように反動化して国際的性格をもつ場合もあるので、各国絶対主義権力の性格規定、各国におけるその進歩性と妥協性、商品生産の発展程度、農民状態の分析を通じて、ナショナリズムの現われ方を見ることが重要となる。

≪国民主義的段階≫

フランス革命をその典型とするもので、封建制と絶対主義を打倒して民主主義を主張し、反革命的な他国の支配をはねのけて近代的な政治体制を確立する段階。前期的段階においては人々は国王の臣民であったが、この段階では民主主義的な国内体制から、民族としての一体感が生れる。フランス革命の自由平等博愛という原理は、本来全人類的な性格を持つのだが、テルミドール反動後、革命の進行をとどめ、資本主義体制を確立するために、ついにはナポレオンによる侵略戦争へと進展した。

ナポレオンの戦争は、ナショナリズムの上に二重の意味を持っている。一七九二年マルセーユの義勇兵に象徴されるナショナリズム[10]の健全さ(反革命的な国際勢力の干渉と貴族の裏切りに対する革命と祖国の擁護)が保持されたのはわずか二年であって、資本主義体

制成立と共にそれは市場を外に求めて侵略へ移った。だが同時に、それはフランス革命の解放原理を欧州各国に伝え、「(i)対内的には政治的指導権を一部少数の特権貴族層の独占から解放してこれを『国民的』基盤に拡大する理想 (ii)対外的にはながらく国際社会の組織原理として通用してきた王朝主義 dynastic principle を打破してネーションを基盤とする独立国家を形成する志向」[11]を大陸諸国に布教して、逆に諸国のナショナリズムを、ナポレオンの帝国主義に対する民族解放戦争[12]を生み出したのである。

「近代ナショナリズムの始祖はルソーであった」[13]とふつう考えられている。ルソーの「社会契約論」において、人民の全体が主権者であり、国家そのものであると規定されて、その愛国主義 (patriotisme) が共同利益の実現のために開花するからである。近代国家の理念を与え、フランス革命を導いた思想の一つは、勿論ルソーであったろう。だが市民革命の実際は、啓蒙思想の普遍主義と愛国心の美しい調和を、薄幸の中に終らせてしまった。革命は自然法を裏切り、新しい階級対立は新しい抑圧と侵略を生んだ。国民主義を真に象徴するものは、ルソーの理念よりはナポレオンの実践である。そしてこの段階においても、新興ブルジョアジーの力の弱い後進国では、労働運動に対する恐怖が容易にナショナリズムを過去の王室の光栄に結びつけることを注意せねばならない。

≪国際主義的段階≫

しばしば混同されるが、インターナショナリズムは元来全く異なった二つの内容を持っている。一つは、上からの国際的な支配であって、古くは古代の帝国主義、中世のキリスト教を経て、現代の国際金融資本に至る世界的な抑圧であり、一つは、ルネサンス以来の個人の自覚、自然法思想、階級意識にもとづく、直接生産者、労働者の、下からの国際的な連帯感である。

たとえばイギリスでは、近代国家の形成が順調に進んだので、絶対主義の段階にも市民革命の段階にもナショナリズムの意識は少なかったが[14]、特に一八世紀になって、その経済的な優位が確立して後は、レセ・フェールと自由貿易が主張されて、ナショナル・インテレストは逆にインターナショナルなかたちで主張された。スミスの経済学は諸国民の富の研究であり、ベンサムの哲学は社会を全て等質の個人に還元し[15]、J・S・ミルの国際貿易論は、「今日では愛国者は、自国の富および進歩の源泉は他の国々の富および進歩にあることを知っている。……実に通商こそは、戦争と当然相反する個人的利益を強め増大し、もって戦争を速かに絶滅に向かわしめつつあるものである。……そして、国際貿易の拡張と激増とは、世界平和のおもなる保証たるものであるから、人類の思想と制度と性質との不断の進歩を永久に大いに保証するものだといっても、決して過言ではなかろう。」[16]と端的に主張している。

これに対して、ブルジョア的な民族解放と世界主義が、実は他国の人民への新しい圧迫をもたらすにすぎないことを早くも見抜いたレヴェラーズの人々であった。彼らは、クロムウェルのアイルランド征服に対立して、アイルランドの解放は、クロムウェルの戦争によってではなく、むしろイングランド自身のより徹底した解放によってのみ可能であると考え、ウィンスタンリは、イングランドが完全に自由になれば、その法は世界中にひろまるであろうと説いた。[17]このような被抑圧者の国際的連帯感は、ゴドウィンの不徹底なコスモポリタニズム[18]を越えて、窮乏化に対する労働者の政治的抗議としてのチャーチズムの時代に再び復活し[19]、やがてマルクス主義へとつながる。[20]

ブルジョア・ナショナリズムの国際主義的段階は、典型的には十九世紀のイギリスであるが、その本来の性質からして、容易に侵略へと転ずることを注意せねばならない。イギリス国内の階級対立が激化し、フランス革命に共鳴する急進主義が活動を始め、革命が過激化するや、革命の波及をおそれた政府が同盟したのは大陸の絶対主義諸国であり、対仏大同盟の中で革命に最も強く干渉したのは、ブルジョア革命の先輩であるイギリスであった。そこで、たとえばイギリスでは、支配階級の国家主義[21]と海外侵攻、それに対立するコブデン、ブライトら自由貿易論者の国際平和主義（砲弾を撃ち合う代りに商品を交換する）、およびプロレタリア国際主義の萌芽の差別を見ることが重要である。

≪国家主義的段階≫

資本主義が帝国主義、一般的危機の段階に入り、国家間の経済競争が激化して、「国際的な均衡が破れると、ここに海外市場の獲得、植民地争奪の激烈な国家主義的段階に突入する。経済上優位にある国はブルジョア民主主義を保持し得るが、さなもいと、支配者は労働運動を押し潰し国外侵略に進むために、ファシズム体制をとりやすい。かくして、個人の利害は国家（金融寡頭制）に強制的に従属させられて、アナトール・フランスのいうように、「人は祖国のために死ぬのだと信じているが、実は産業のために死ぬ。」そこでは、コミュニケィション・メディアを大量に用いることによって、国家意識が鼓吹され、自己の民族について特殊な使命観が強調されて、それがカリスマ的権威に対する絶対服従、労働運動の弾圧、独善的な排外主義をますますつのらせていく。

ファシズムはしばしば中間階級、または労資の階級均衡の上に成立すると説かれる（たとえば P. Sweezy）。だがそれは、独占資本と労働運動の挟撃にあった中間階級の絶望を手がかりとして進出するが、「ファシスト国家が一度成立した時に、強制的に組織されるのは大衆であって資本ではなく、海中に投げ捨てられるのは急進的な綱領であって剰余価値ではない。」[22]そこで、ファシズム運動の実体、それに対する金融資本、中間層、労働階級、農民などの諸階級の意識と行動を、その統一性に眼を奪われることなく解明せねばならない。

≪民族主義的段階≫

列強の帝国主義的な支配に対して、搾取される植民地諸国の民族がその解放を要求する段階。その例はすでに十九世紀の東欧にも見

出せるが、そこではまた新しい従属関係が生まれたのに対して、今日では植民地主義への抵抗が世界的な規模に拡がり、帝国主義に対する社会主義革命の一翼としての意義をもっている。民族は、まだその歴史のすべての歌を歌い終ってはいない。

この区分において注意すべきことは、これらの段階を各国が直線的にたどったのではなくて、国によりさまざまなコースがある点である。たとえば先進国のイギリスは国家主義、民族主義段階を欠くし、後進国の国民主義、国際主義の段階は極めて少ない。従って、ある時代におけるナショナリズムの様相は、カーの考えるように単一のものではなく、世界資本主義の中で占める国々の個性的な地位に応じて、複合性を持っているのである。このような考え方は、世界政治の舞台で動くナショナリズムの力関係を理解する上に、より具体的な力学を提供するであろう。

このような複合性は、更に一国の内部にも及ぶ。基本的には資本の運動の反映であるナショナリズムは、国王貴族から労働者まで、その包括する階級は数多いが、ナショナリズムの表われ方はその階層、階級によって異なっている。イギリスの国際主義の、階級によるニュアンスについては先にふれたが、例えば日本のナショナリズム[23]において、勿論日本の特殊性はあるにしても、尊皇攘夷運動は前期的段階、加藤弘之らの国権論は新絶対主義、「学問のすすめ」時代の福沢や自由民権論は国民主義的段階であり、条約改正運動にみ

るような民族主義の面、田口卯吉らの自由貿易論もあって、維新前後の短い期間をとってもナショナリズムのいろいろな段階が集約され、国家意識の実体はその担い手によってさまざまであった。このような考え方は、ある国のナショナリズムを考察する場合、その性格を単にその国の伝統や特殊性に解消するのではなく、各国の有機的な連関を把握するための基礎を与えるであろう。

（1）H. Kohn; The Idea of Nationalism. A Study in Its Origins and Background, 1948, Chap. I.

（2）C. J. H. Hayes; The Historical Evolution of Modern Nationalism, 1931, p. 1. 小林訳一頁。

（3）H. L. Koppelmann; Nation, Sprache und Nationalismus, 1956, S. 13.

（4）F. Hertz; Nationality in History and Politics, 1944, p. 149.

（5）レーニン『『人民の友』とはなにか」全集第一巻上一四九頁。

（6）スターリン「民族問題とレーニン主義」国民文庫一二三頁。

（7）同右、一二六頁。

（8）勿論これは、生産関係とナショナリズムを一義的に結び付けることではない。下部構造が不可逆的であるのに対して、軍国主義、ファシズムなどは可逆性をもっている（丸山真男「現代政治の思想と行動」下巻一九五八年、三六四頁参照）。だが、たとえば帝国主義の不均等発展と植民地主義は、民族問題を不可避的なものとするのである。

（9）このような見解に対して、J. A. Gobineau, H. S. Chamberlain, G. Lapouge などの人種論的民族論、文化人類学的方法論、パーソナリティ論ならびにその批判については、講座「社会学」第五巻「民族と国家」の竹内郁郎氏の論文参照。また E. Renan, R. Muir, M. Weber, F. Hertz, F. Oppenheimer, R. M. MacIver などの主観的民族論については、新明正道「史的民族理論」一九四八年、四〇～六頁参照。

（10）江口朴郎「帝国主義と民族」一九五四年、一七七頁。

（11）丸山氏、前掲書、二九六頁。

（12）レーニン「ユニウスの小冊子について」一九一六年、国民文庫「帝国主義と民族・植民地問題」三七頁。

（13）E. H. Carr; ibid., p. 7. 訳一二頁。

（14）étatisme に相当する英語はない。state という言葉は小国を表わして精彩を欠く。Cf. Carr; ibid., p. 1. 訳四頁。

（15）「ベンサムほど島国根性の少なかったイギリス人は稀であった。」H. Kohn; Prophets and People, Studies in Nineteenth Century Nationalism, 1946. 長谷川訳二五頁。

（16）J. S. Mill; Principles of Political Economy with some of their applications to social philosophy, 1848, vol. II, p. 120. 戸田訳三分冊二四八頁。

（17）浜林正夫「国民主義」、講座「近代思想史」Ⅲ一九五九年所収、一六六頁。

（18）「政治的正義の最も本質的な原理の一つは、詐欺師や愛国者があまりに度々一致して推賞したところのものとは正反対である。……全体の富、繁栄、光栄とは、理解し難い妄想である。……われわれの国に対する愛とは、これまでしばしば述べたように、詐欺師たちによって人々を彼らの詐欺計画の手段にするために用いられる、あの尤もらしい幻影の一つだということがわかった。……政治的正義の価値を理解して、それを主張しようとしている人々のいるところはどこでも、それが彼の国なのである。彼がこれらの原理を拡め、人類の真の幸福に役立つことができるところはどこでも、それが彼の国である。」W. Godwin; Enquiry concerning Political Justice, and its Influence on Morals and Happiness, vol. II, 1798, pp. 145～7. 無政府主義は勿論コスモポリタンな性格を持つが、ゴドウィンは、快楽・幸福量の増大という正義の原理において快楽を質的に区別する理性を強調し、啓蒙思想家の間では最もエゴイズムが少ない。ただしその立場は中間的であったから、"History of the Commonwealth of England", 1824. においては、「（革命）政府を安定させ諸外国から重んぜられ尊敬されるために」、クロムウェルのアイルランド侵略を支持し

ている。

(19) *Cf.* A. R. Schoyen; The Chartist Challenge, A Portrait of George Julian Harney, 1958. 労働運動の国際的提携は、チャーチズム運動における亡命革命家の国際的組織、五九年のロンドン建築工のストライキ、南北戦争の干渉に反対したイギリス、フランスの労働者の運動などを契機として急速に発達した。チャーチズムから第一インターに至るインターナショナリズムの成長は、労働運動としてのチャーチズムの研究に新らしい興味を呼び起している。

(20) 「労働者は祖国を持っていない。その人の持っていない物をその人から取ることはできない。プロレタリアは先ず政権を握らねばならぬ。国民的階級たる地位に登らねばならぬ。自己を国民として結成せねばならぬ。だから、その意味において、ブルジョアジーの意味とは全く違うが、やはり国民的である。」(Marx, Engels; Manifest der Kommunistischen Partei, Dietz, 1953, SS. 29~30. 早川訳五〇頁) マルクス、エンゲルスのインターナショナリズムの実践的性格(単なる理念でなく)が、この文章から読みとれる。ただし、「宣言」では民族の形成は資本主義の成立と結び付けられていないし、「国家間の差別及び人種間の反目は、ブルジョアジーの発達のために、通商の自由のために、世界市場のために、生産方法及びそれに相応する生産関係の同一化のために、最早段々消滅しつつある」という

考えは、不均等発展の事実によって否定された(井上清「マルクス主義による民族理論」岩波「現代思想」Ⅱ所収、七六頁参照)。もちろん、マルクスが一八六九年にイギリス労働者の社会主義運動の利益のためにアイルランドの自由と民族独立を要求したこと、「反動的」民族と革命的=民主主義的民族とを区別して一八四八年のチェコ人の民族運動に否定的な態度をとったこと、などは示唆に富むが、民族自決権、民族解放戦争などが特に重要な意味を持つに至ったのは、マルクス以後のことである。マルクスの民族観の研究としては、古くは Heinrich Cunow; Die Marxsche Geschichts,-Gesellschafts-und Staatstheorie, Ⅱ. Band. がある。

(21) 支配階級のナショナリズムとして、たとえばバークの伝統主義、マルサスの地主擁護論がある。

(22) M. Dobb; Political Economy and Capitalism, 1940. 岡訳二四九頁。

(23) 明治ナショナリズムの問題点については、坂田吉雄編「明治前半期のナショナリズム」(一九五八年)と、それに対する私の書評(「三田学会雑誌」五二巻二号)参照。

四、ナショナリズムの批判と現代の課題

一般にいって、ナショナリズムは両刃の剣である。それは、外に対しては排他的、独善的な民族エゴイズムと国家間の従属関係を生み出し、内には国家利益のために多少とも抑圧的となり、徹底した民主主義、普遍主義とは相容れない。たとえば、国民主義の段階においても、クロムウェルのアイルランド征服、ナポレオンのエジプト侵攻があり、現代の民族主義段階においても、インドとパキスタンの争い、アラブ連合における共産党抑圧などが指摘される。

そこで、ナショナリズムは、欧米民主主義と社会主義の双方から挟撃を受ける。カーがその書の冒頭に引いたアクトンによれば、「nationality は自由をも繁栄をも目的としない。それは、これらのいずれをも、民族をもって国家の鋳型と尺度にするという至高の必要のために犠牲にする。民族の歩む道は物的精神的廃墟をもってしるされるであろう。」トインビーによれば、「今日のわれわれの西欧的世界においては、レヴァイアサンの崇拝——自己の部族の自己崇拝——というものが一個の宗教となっており、われわれはみなこれに多少とも忠節をはげんでいないものはありません。ところでこの部族的宗教は、もちろん一片の偶像崇拝でしかありません。」[1] そしてヘイズによれば、それは不寛容であり、宗教的であり、戦争の脅威を生むのである。[2]

また社会主義の側からは、ナショナリズムは本来ブルジョア的であり、プロレタリアの利益をブルジョアジーに従属させるものとして攻撃される。資本主義社会の階級分化が激しくなれば、民族の一体化というのは一つの欺瞞にすぎなくなり、それをこ塗するために科学がゆがめられ、外からの危機の宣伝と使命の強調を通じて、排他的、侵略的感情が動員される。それは、対外的には他国を犠牲にした市場の争奪であり、対内的には、元来インターナショナルな性格を持つ革命によってのみ解決されるものを、単に民族の問題に解消し、プロレタリアの国際的な団結を破壊する反動であるとして、ブルジョア民族主義とプロレタリア国際主義がややもすると機械的に対比される。[3]

だが、ナショナリズムの民族主義的段階について、早くからその意義を強調したのはレーニンであった。一九一三年、彼は「後進のヨーロッパと先進のアジア」という逆説的な題の下に、「アジアには、いたるところ、強大な民主主義運動が、生長し、拡大し、強固になりつつある。アジアにおいては、ブルジョアジーは、まだ、人民と一緒に反動に抗してすすんでいる。数億の人間が、長夜の眠りより生活へ、光明へ、自由へと目ざめつつある。集団主義への道は、民主主義を通じていることを知っている階級意識あるあらゆる労働者の心情に、この世界的運動は、何という歓喜を、よびおこしていることであろう! すべての誠実な民主主義者は、若きアジアに対して、何と胸をおどらしていることであろう!」と書いて人々の眼をアジアの民族運動へ向け、今日の状態を予想していた。またローザ・ルクセンブルグが、「社会民主主義の危機」において、戦争の帝国主義的性質を強調するのあまり、帝国主義時代には民族戦争はあり得ないといったのに対し、一九一六年、「ユニウスの小冊子について」において、「植民地および半植民地のがわからの民族戦争

は、ありうるばかりでなく、不可避的であり、進歩的、革命的」であり、それについての無関心は排外主義であると説いた。

レーニン段階の民族主義が単なる抵抗であったのに対して、今日のそれは欧米列強からの解放の実現であり、世界史的には帝国主義に対する社会主義革命の一翼としての意味を持っている。中国は人民民主主義革命を遂行し、インドもまたある種の社会主義を意図している。そしてこれらを指導したものは、中国などを除けば、かつてスターリンが期待したようなプロレタリアートでも共産党でもなく、たとえばインドにおいては、ブルジョアジーと会議派であった。

民族戦争については、すでにレーニンのくり返し説くところであるが、今日のナショナリズムの世界史に占めるあまりにも大きな意義、その中における共産党の比較的小さな役割（勿論中国は別だが）という現実を前にして、マルクス主義は深刻な混乱を起こすに至った。あるものはレーニン、スターリンの書から民族についての単なる形容詞を引いて民族の神秘性に感激し、あるものは民族内部の階級関係を無視して単にその世界史的な意義に酔うのである。勿論今日のナショナリズムの、愛国主義と国際主義を結ぶ地盤をもち、諸国の連帯感が強く、平和原理の提唱者であり、現実的な性格を持っているというような点は、[5] レーニン段階以後の特徴として高く評価すべきであろう。だがそれを指摘するだけであるならば、再び理論は現実の単なる事後承認を繰り返すだけではないか？

ヨーロッパに比べて、今日のナショナリズム地域の社会的な特徴は、人口の非常に大きな部分である農民や半プロレタリアが、胸のふさがるような貧困と無教養の下にあるということである。上層は封建的大地主や石油利権の上にあぐらをかく少数の買弁的な資本であり、その中間には、小規模の家内工業的な民族資本や商人がいるにすぎない。大衆にとって「最大の闘いは生存のための闘い」[6]であり、特権を持つ少数上層の富裕に対して、広汎な大衆のおそるべき貧困という激しい断層は、しばしばそのナショナリズムに熱狂的な性格を与えるのである。この運動を指導するものは、ヨーロッパの教養を受けたインテリゲンチャ、軍人、民族資本家などのブルジョア的要素であり、その巨大なエネルギーを与えたものは、大衆の本能的な貧困への抵抗、植民地搾取への抵抗、西洋の支配に対する抵抗及び封建的な社会関係に対する抵抗であった。

ナショナリズムの担い手が知的ブルジョア、中間階級の利害を代表する軍人（中近東では軍部が近代的に組織された唯一の実力ある単位であり、軍部を除いては民族革命を遂行する組織が実際上存在しない）[7] であるということは、そこにまたいろいろな問題を投げかける。彼らの中立政策は、現在平和勢力としてその持つ意味は極めて大きいが、先進国の援助によって生産力が増大した場合、その生産関係にどのような変化を生ずるか？

すでに述べたように、彼らのナショナリズムの性格も、その担い手によって変化するであろう。インドの社会主義化は、旧習打破、農業改革、福祉政策を意味するが、土地改革は生ぬるく、財閥の産

業支配が進んで、政府は大部分財閥の関係者であるから、資本主義的所有にほとんど手をつけることができない。その意図するところは、資本主義と社会主義の混合経済であるが、財閥の援助を受ける会議派にその進路を委ねられている間は、不名誉な妥協に終るのみであろう。アラブの民族主義は、外国勢力から解放された後は、アラブ連合共和国とイラクという二大勢力の間に、ナセルの反共政策、イラクの反革命運動をめぐって確執を生じ、国内、国外の諸階層の利害を一致させることは難かしい。農地改革の停滞、政情不安、共産党抑圧などは、軍事独裁体制の危険を感じさせるのである。

今日のナショナリズムの動きを、単に外側から総体としてみるだけではなく、内部の階級関係の分析にまで進むならば、そこでは政治を動かしている少数のブルジョア的分子と一般大衆の断層が激しく、その動きいかんによっては軍事化、宗教と利権をめぐる紛争の増大、イラン、パキスタンにおけるように再び買弁化の可能性をも指摘せざるを得ない。民族問題の真の解決策は、勤労者の福祉の増大と徹底した民主主義であり、プロレタリアの民族観は、人民大衆の基本的利益に密着することである。そのようなナショナリズムの形成こそ、A・A諸国の課題であり、それのみが、はじめて真のインターナショナリズムの道へ通ずるであろう。

（1）A. Toynbee; Civilization on Trial, 1953, p. 236.

（2）C. J. H. Hayes; The Historical Evolution of Modern Nationalism, 1931, p. 310. 小林訳三二二頁。

（3）「民族的利益は、勤労人民大衆を、その不具戴天の敵である帝国主義に奉仕させるための、欺瞞の手だてに役立つにすぎない」――ローザ・ルクセンブルグ。今日でも、たとえばチトーの態度はブルジョア民族主義の泥沼におちこんでいると攻撃される（劉少奇「国際主義と民族主義」参照）。

（4）「革命を前進させ、資本主義的に発達した植民地・従属国の完全な独立をかちとることは、妥協的な民族ブルジョアジーを孤立させ、このブルジョアジーの影響のもとから革命的小ブルジョア大衆を解放し、プロレタリアートのヘゲモニー確立の政策をとり、労働者階級の先進分子を独立の共産党に組織することなしには、不可能である。」（スターリン「東方人民大学の政治的任務について」前掲国民文庫一〇六頁）

（5）長洲氏、前掲書、六九～七二頁。

（6）W. Macmahon Ball; Nationalism and Communism in East Asia, 1952, p. 3. 大窪訳四頁。

（7）日本国際政治学会編「二つの世界とナショナリズム」一九五八年、一一四頁。

〔附記〕社会主義内部の民族主義については、紙数の制限により省略せざるを得なかった。なお最近のナショナリズム研究としては、Koppelmann のほかに、Général P.-J. André; Le réveil des nationalismes, 1958. がある。